

「平成 25 年度 真名川ダム弾力的管理検討委員会」 議事概要

○日時：平成 26 年 2 月 12 日（水）16 時～18 時

○場所：多田記念大野有終会館（結とぴあ） 303 号室

○議事内容：

■平成 25 年度の実施結果

■平成 26 年度の実施計画

■本格運用に向けて

上記 3 点について事務局から説明。

主な質疑応答、意見の内容は、以下のとおりである。

■平成 25 年度の実施結果

【実施結果全般】

（委員長）

- ・真名川では、この 3 年間で比較的大きな出水が発生し川が大きく動いたということがポイントであり、各調査結果に現れている。各調査結果の相関性がわかると、より理解しやすい。
- ・洪水により川が動くと、淵が埋まるのではなく、瀬と淵のメリハリができる。
- ・調査結果は、洪水や置土、水際ほぐし、伐木などの効果が相乗的に表れている。今後の整理では、それぞれの効果が確認できるところ、確認できないところがある全体のマッピングができるとうい。

（委員）

- ・底生動物調査は、よい結果が出ている。評価方法としては、資料のような集団で評価することによりよい。ただし、今後はどの種を選定するかは難しいが、この場所であれば、オオヤマカワゲラに着目して評価を行うと指標になると考える。

（事務局）

- ・今後、どのような調査や整理手法が適切かについて検討していくが、地域の協力を得ながら進めていきたいと考えている。

【2.4k 砂州と出水の関係】

（委員）

- ・2.4k 砂州においては平成 23 年の出水の影響はどうだったのか。

（事務局）

- ・2.4k 砂州は、平成 23 年の出水後に着目するようになったため、データの蓄積はあまりなく、平成 23 年の出水による影響は明確でない。
- ・これまでの調査結果から、平成 24 年や平成 25 年のような $200\text{m}^3/\text{s}$ から $300\text{m}^3/\text{s}$ 程度のインパクトをもつ出水をある程度の頻度で与えれば砂州を維持できることが分かってきた。

(委員長)

- ・現在の状況を維持することが大事である。何もせず放っておくと平成 22 年のような状態の戻ってしまう。300m³/s 規模の放流は非常に大きく毎年放流するのは難しいが、150～200m³/s 程度なら放流可能で、おそらく砂州も維持できると思われる。

■平成 26 年度の実施計画

【調査計画について】

(委員長)

- ・年次計画の中で調査頻度を 5 年に 1 回としているが、この点について説明していただきたい。

(事務局)

- ・本格運用に移行すれば調査の主体が福井県へ替わる予定であり、福井県の負担を減らすためにも、必要最低限の調査項目・頻度に絞っている。
- ・弾力的運用で 200m³/s の試験放流が実施可能となった場合、調査を行う必要があることを認識している。ただ、今後、福井県と調整しながら実施にむけて分担、協力をしたいと考えている。

(委員長)

- ・大きな出水があればその影響を把握するため、調査項目を追加する必要がある。
- ・調査の負担を減らすという観点から、水辺の楽校で実施している調査と連携してはどうか。

(委員)

- ・細かい分析まで行っているわけではなく、資料に記載されたのと同じレベルのデータを提供できないため、連携することは厳しい。

【地下水について】

(委員)

- ・調査計画に地下水の項目がないが、観測は実施するのか。

(事務局)

- ・地下水の観測は、これまでと同様に自動水位計により実施する。

【自然出水再現放流・置土について】

(委員)

- ・平成 25 年はダム放流により用水取水口(頭首工)が頻繁に壊れ用水に影響が出ているが、自然出水再現放流は、どの程度の放流量を予定しているのか。放流の際には用水取水口(頭首工)への影響を考慮していただきたい。自然出水の場合は、やむを得ない面があるが、試験放流は、少し配慮が足らなかったと感じている。
- ・魚のエサとして販売するために底生動物を岐阜から採取する業者から、底生動物が少なくなったと聞いている。近年は、浮き石が埋まり、底生動物も昔に比べ少なくなっており、彼らの生息環境が非常に変わってきているが、これは、出水だけではなく、置土が影響しているのではないかと考えている。

- ・今後の放流は、以上の内容について、配慮していただきたい。

(事務局)

- ・過去の融雪出水の規模では、砂州を維持する能力が不足しており、 $200\text{m}^3/\text{s}$ の放流を考えている。

(委員長)

- ・自然出水再現放流は、ダムが無ければ本来自然に発生していた出水を再現しようとするものである。そのような放流をすれば、ある意味壊れるのは当たり前であり、施設を維持するには取水施設を繰り返し補修するか、影響を受けないように強化することが考えられる。いずれにしても自然出水再現放流を実施する際には、取水への影響を配慮する必要がある。
- ・川が動き、瀬・淵が形成されるような生物に良好な生息環境を目指すには、洪水と土砂が必要である。真名川では、数十ミリの砂利が決定的に不足しており、この土砂をどうやって供給していくのか。置土はその方法の一つで、水際ほぐしも土砂供給になる。
- ・どんな粒径のものがどこに流れ、どんな効果をもたらすのか検証が必要であるが、今後も置土を続けていくべきである。
- ・底生動物の減少は、洪水で川が動き一時的に減少しただけで、増減を繰り返している中の現象と捉えた方がよい。川が安定してそのような環境を好む底生動物が多い川が良いのか（必ずしもそのような種が多いことは良い環境であることを意味しない）、河床が動いている環境を好む種が多い川がいいのか、という川の姿について、どのような川を目指すのか大野市を含め議論が必要である。
- ・天竜川でアユの産卵床の調査を行った。その結果、数十 mm ぐらいの砂利がやわらかくたまっているところに産んでいることがわかった。この場所というのは、2次流路が本川に合流するところ、つまり、本川に砂利が押し出されてできるミニデルタで、湧水がわいているところである。天竜川では、このような場所が昔に比べて非常に減少しており、漁協さんと一緒になって増やす方法を議論している。天竜川では、河床変動シミュレーションによる予測検討を行っているので、そういった情報も機会があれば紹介し、それらを参考に真名川でどのようなやり方が良いか検討していけば良いと思う。
- ・「真名川らしさ」という観点でいうと、今後どのような川を目指して行くことが真名川にとって良い状態となるのか、これは大野市も含めて議論していくことが必要と思いますが、いかがでしょうか。

(副委員長)

- ・沿川住民の意見を聞きながら我々も含めて議論していくことが大切だと思います。

■本格運用に向けて

(委員長)

- ・ $100\text{m}^3/\text{s}$ では力不足で $200\text{m}^3/\text{s}$ 程度が必要な流量。また、6時間は現実的などころである。つまり、 $200\text{m}^3/\text{s}$ 、6時間が1つの放流方法として考えられる。
- ・自然出水再現放流は、今までと違うことをするのではなく、ベースの放流量がある中でその放流量を増やすことであり、これまでの延長線上の放流を実施することである。

(委員)

- ・融雪期が 5/31 までは長すぎるのではないか。

(事務局)

- ・これまでのダム運用状況、またアユの放流時期も踏まえ、もう少し融雪期の期間を絞り込むことができる。
- ・アユの放流前に、今回示させていただいた放流を実施したいと考えている。

(委員長)

- ・自然出水再現放流を実施するかどうかは、融雪出水の予測との関係もあるが、遅くなるといろんな調整（アユの放流時期等）も必要となるため、実施するなら早目（例えば 4 月等）の方がいいだろう。
- ・今後はこのルールで放流し続けるのではなく、検証していきながら適宜見直しが必要である。
- ・今回の委員会は、試行・試験から本格運用に向けての節目であり、本格運用の方向性の提案だったと思う。

(事務局)

- ・一つの目安として、今年度まとめられた。
- また、融雪や 9 月・10 月の台風など大きなインパクトがあれば、必要な調査・検証を行い、その精度を上げていきたい。
- その他、現地調査においても必要があれば追加して行いたいと思っている。

以上